

都図研
NEWS
TOZUKEN

都図研広報発行 平成30年度都図研ニュース

7月号 / 2018

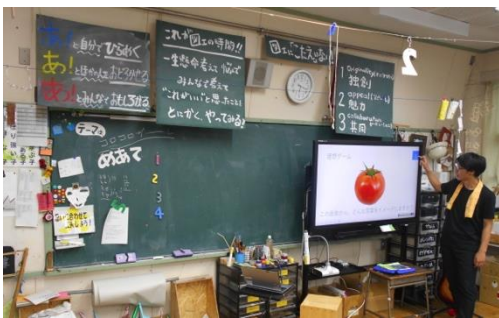
突撃 とりの図工室

府中市立府中第三小学校の図工室

学校でひとつの図工室。普段はなかなか見ることのない他校の図工室を訪れて、気になる所を突撃取材！

北多摩ブロック

今回は、山内佑輔先生の図工室を取材します。



府中第三小学校の山内先生の図工室は、とにかく楽しい。きっと子供たちはここが大好きで、この空間を使いこなしているのだろうと、子供のいない図工室を見ていても感じてしまう。宝箱みたいに材料や道具がずらりと並び、遊び心たっぷりの山内先生の手書きの表示がいたるところに張り付いていたり、ぶら下がっていたりする。「これはいただきものです」という、巨大なアーティストの作品も、その空間に溶け込んでいる。カラフルで、自由で、良い意味で「学校らしくない図工室」だ。

それもそのはず。山内先生は、図工室をとことん子供たちにとっての「非日常」に仕立て上げようとしている。日常と違う空間に身を置くことで、子供たちをワクワクさせたいという願いがこの図工室に現れている。

「子供たちがワクワクする仕掛けを考えるのが好きなんです」と楽しそうに話す。「いつもと違う＝非日常性は、固定概念を揺さぶって、創造力を引き出す」というワークショップデザイン論に着想を得たという。

山内先生は、大学では政治経済学を専攻。教育専攻でもなければ美術専攻でもなかった。大学卒業後、9年間の社会人経験を経て、小学校全科として教員採用試験に合格。そんな経歴をもつ山内先生は、図工専科としての専門性の足りなさに迷いもあるという。しかし、それ故の固定概念に毒されていない身軽さが、自由で、子供をワクワクさせる非日常的な空間や時間を可能にしているのだろう。

「独創・魅力・共同」を、図工室前面に掲げる山内先生。図工や美術という枠にとらわれず、広い意味での「創造と表現」の場をつくろうとしている。その空間・時間の中で、試行錯誤を繰り返し、課題を発見して解決に向かう、そのプロセスこそが学びと考えているのだそうだ。

学校はもっと面白くできる。山内先生の図工室へ行くと、そう信じたくなる。

取材担当者：渡邊 裕樹（昭島：つつじが丘小）



特別委員会 教科提案部

昨年度から発足し、今年度から学級担任を含む9名にメンバーが増えた教科提案部。今年度の活動について、ご紹介します。

教科提案部は図工科に携わる教員としての在り方を提案する組織です。

みなさんは目の前の子供たちにどんな大人になってほしいですか？

目指す大人像を見据えた題材やカリキュラムの提案を通して、わたしたちは「図工に対する思いや考え方を教員一人一人が自分なりにもつ大切さ」について提案します。

今年度はカリキュラムデザインの例を研究し、若手を中心とした先生方が研修できるようにしながら、内容を発信していきます。

そして都内の先生方の思いや知恵を結集させて、これからの図工について本気で考えていける場、広げていける場をつくっていきたくと考えています。

東京都の図工をもっと面白く、関わった人々の人生をもっと面白く。それがわたしたちの願いです。

提案部日よりや提案発表(1月予定)をどうぞお楽しみに。

教科提案部：藤井隼人（北：神谷小）

第71回全国造形教育研究大会

秋田大会 7月30日(月)・31(火)

今年度の全造連全国大会は夏季休業中の7/30(月)・31(火)の2日間で行われます。小学校会場は秋田市内の秋田大学附属小学校と秋田市立明徳小学校になります。

「あきた発 新たな美を拓く ～わたしを問い、発信する造形活動～」を大会テーマと掲げ、秋田の造形教育が豊かな自然や先人の営みによって支えられてきたものであることを確認しながら、全国の造形教育のさらなる発展にもつながる大会にすべく、授業作りを中心に準備を進めてきました。提案される授業では「わたしの美を拓き、わたしを問い続け、わたしを発信していく子供の姿」を観る事ができればと願っています。また、「あきたの形」「あきたの色」を考えながら、造形教育を通して子供達に伝えたいものやことを、全国から参加される方々と共に明らかにしていきたいと考えています。

今年度の大会は夏季休業中ということもあって遠方ではありますが比較的都合のつけやすい日程ですので皆様お誘い合わせの上、ぜひ参加して大会を盛り上げていただきたいと思います。よろしくお祈りします。

* 秋田県造形教育研究会ホームページ <https://akitazoukeiken.wixsite.com/akita-zokei>

最終案内掲載中

全国造形教育連盟事務局長 鶴内 秀一 (東久留米：東久留米第三小)

都図研マガジン

いま、連携授業を考える

6月のある日、東村山市立南台小学校の図工の授業では、図工専科の河野先生の他に、7名の大人たちが子供たちの活動をサポートしていた。NPO職員の他、普段は建築家やミュージシャンをしているという面白い大人たちが、大きな木材をせっせと運んだり、インパクトドライバーをガンガン鳴らしていたりする。

実際に開け閉めできる大きなドアをつくるチーム。ナタで竹を割って組み立て、ドームをつくるというチーム。各班1名程度の大人がサポートすることで、子供たちも、ダイナミックな活動を展開していた。

これは、NPO法人アートフル・アクションとの連携授業。河野先生は、この連携授業を、6年間に渡り毎年行ってきた。野焼きの授業、小屋を建てる授業、船をつくって校内を通過する川に浮かべる授業、市内の他校との連携など、一人の専科の力では、なかなか実現できない授業も、アーティストを含むたくさんの面白い大人たちとの連携によって生み出されてきた。

ただ単にマンパワーとしてのサポートではなく、教師の願いをもとに、「そもそもどんな授業にするのか」というアイデア出しの段階から、話し合っていく。題材全体の計画から、材料の選定と調達、展示方法まで、トータルで一緒につくっていく。それが、アートフル・アクションの連携授業の特徴だ。

アートフル・アクションのテーマは、「街はみんなのミュージアム」。事務局長の宮下美穂さんは、「もし学校がミュージアムだったら、学びはどう変わるか」を問い続け、「学校と外部(支援者と被支援者)という二項関係を越えよう」としているという。

着任2年目の頃から、外部との連携授業を毎

年実践してきたという河野先生。「最初は、有名なアーティストや大きな美術館と連携することが多かった」。しかし、地域にある学びの資源を意識した連携を考えるようになった時期に、前任の小金井市で、市の芸術文化振興事業である小金井アートフル・アクション！(小金井市芸術文化振興計画推進事業)の一環で授業を実施し、そこで地域のいろいろな人たちと一緒に授業をつくるこの連携に至った。

今年度の連携授業のテーマは、6年生の子供たちが総合の時間に調べている、東村山市内の「多磨全生園」でハンセン病と人権問題と向き合う。河野先生は、「これまでは、連携授業で、子供が体全体を使う大きなことを経験できる活動を企画してきたけれど、今回は心に踏み込んでみたい」という。

冒頭で紹介した大きなドアは、人それぞれにとって安らぐ場所につながるドアを表現しようとして、訪れた人が落ち着く光を選べる「心の光の部屋」をドアの奥に表現しようとしていた。校内にドアを展示し、学校公開では多くの人たちに思いを伝える。

地域の学びの資源を掘り起こして授業をつくることで、「地域に子供をつなげ、地域に子供が帰っていく」。河野先生は一過性の連携授業に留まらない、新たな連携の形を探り続けている。

(広報部・渡邊裕樹)



河野 路
(東村山：南台小)
×
小金井アートフル
アクション！